

東北の夏祭りとお祭りー山車（だし、屋台）について

今年も東北の各地で、夏祭りが行われ、今は秋祭りが行われています。今回は、山車について述べます。祭りの多くは、神社の祭りです。神輿や山車は、各町内から神社へ終結します。そして、各町内を運行して、神社へ戻ります。神様が運行する手段が、神輿や山車です。

山車は、綱などを引き手が引くことによって移動します。山車の中では、笛や太鼓のお囃子が演奏されます。山車の屋根には人が乗って、踊りや掛け声をかけます。山車を作ったり保存するためには、多額の費用がかかります。山車が出る町の多くは、商業が盛んで、商人の財力による所が多いです。江戸時代の後半の身分制度は、「商工農士」の順だったのです。

花輪ばやし（8月19日～20日、秋田県鹿角（かずの）市）

「日本三大ばやしの1つとされ、その囃子の美しく力強い名調子が心を揺さぶる七夕行事。将棋の駒型をした王将灯籠と直径2メートルの大太鼓の屋台10台が夜通しお囃子と共に2日間練り歩く。輝くような金箔と総黒漆の贅沢なまでの屋台が競演を繰り広げる様子は圧巻。各町内それぞれに工夫を凝らした合戦図など見どころが数多い。」

「花輪ばやしは花輪の産土神・幸稲荷神社の祭典に奉納される祭りばやしです。総勢10町内の屋台が市外の各地をまわりながら運行します。

一番の見どころは屋台が勢ぞろいする駅前行事ですが、その後も夜通し練り広げられる各所の行事も必見です。各町内の若者が溢れんばかりの体力と情熱で練り歩く様は、血湧き胸躍るまさに熱狂の感動を観るものにもたらしめます。」（パンフレットから）

福島稲荷神社の連山車（10月7日～9日、福島市）

戦前からの福島稲荷神社例大祭は「おいなりさんのお祭り」として親しまれてきたものの、高度成長期以降は郊外のベッドタウン化とともに街中の人口が減少、秋祭りも年々寂しくなってきました。

1980年代になると、かつての賑わいのある祭りを復活させようと、各町会で行われていた山車の運行を、一堂に会して行う計画が発案されました。そして昭和57年、6つの町会が参加して「連山車」が始まります。以後は次第に参加する町会も増え、現在では20を超える町会が参加、ふくしまの秋を代表する風物詩です。

連山車は「例大祭」の2日目の夜に行われます。

参加する人達にとっては、山車を通じて自分たちの「まち」を意識する機会になります。山車の引き手、お囃子を奏でる人など、子供も若者も大人も一緒になって山車を運行。ふるさとを出た人達も連山車に合わせて帰郷するようになりました。親戚や友人達に声をかけ、そうして賑やかに山車が運行されます。それが、やがて福島の『町』と人々の絆になっていきます。」（パンフレットから）

【日本三大ばやしの一つ 花輪ばやし（秋田県鹿角（かずの）市）】



【福島稲荷神社 連山車 左は福島放送の女子アナ（山車からツイ目移り（福島市）】



【衆議院選】“平和と立憲主義を守る”野党（共産・立憲民主・社民）と市民との共闘
VS “日本を戦争できる国にする”保守（自民・公明）と超保守（希望・維新）の連合
“与党は1/2以下の議席に、野党3党の合計で1/3以上の議席を” 私の願いです。